

中島樂章編

『南蛮・紅毛・唐人』

——一六・一七世紀の東アジア海域——

思文閣出版 一〇一三・一二刊
A5 四一八頁 六八〇〇円

はるか昔から世界は海域を通じて接続し、様々な人々が地域を越えて交流を行っていた。港町では、多様なエスニシティを持つ集団が混在し、異なる地域からの情報や文化が伝達されていたのである。一六・一七世紀の、日本から東南アジアにまで広がる「東アジア海域」世界もまた、同じ様相を呈しており、そこでは平和裏な交流から紛争まで様々な事態が混在した。

本書は、そうした状況下の東アジア海域世界を、主だって活動していた「唐人」、「南蛮」、「紅毛」、さらには日本の人びとに注目しながら描き出すものである。具体的に、「唐人」は中国・朝鮮、「南蛮」はポルトガル・スペイン・イタリア、「紅毛」はオランダ・イギリスの人びとを指す。同じ時代、同じ場所を生きたこれらの人びとは、それぞれの視点からアジアの海を眺望し、さまざまな言語でその様子を後世に書き残した。そうして残された歴史史料は、一つの事態を同じく目撃したにもかかわらず、文化的背景、立場の違いなどに起因して、異なる内容を示すことがしばしばある。そうした状況にあつては、一つの言語史料を検討するのみでは歴史の実態を十分に写し出しているとは言い難い。複数の言語

史料を余すことなく検討し、個々の視点を含めて複合的に東アジア海域の歴史を捉え直している点が、本書の特色である。

本書で扱われる内容は、唐人、南蛮、紅毛と日本の関係を主に扱うもの、同時代の東アジア海域の日本以外の地域の展開を描出するものの二つに大別される。日本との関係を検討したものとして、「一五四〇年代の東アジア海域と西欧式火器―朝鮮・双嶼・薩摩―(中島樂章)」、「堺商人日比屋と一六世紀半ばの対外貿易」(岡本真)、「ドイツ・ポルトガルに現存する戦国大名絵画史料」(鹿毛敏夫)、「近世初期東アジア海域における情報伝達と言説生成」(藤田明良)が所収されている。

一方で、これらの論文で示されるような状況下にあつた日本と同時代における、他の東アジア海域世界における歴史展開を描き出しているのが、「ムラカ王国の勃興―一五世紀初頭のムラユ海域をめぐる国際関係」(山崎岳)、「一六〜一七世紀のポルトガル人によるアジア奴隷貿易」(ルシオ・デ・ソウザ)、「清朝の台湾征服とオランダ東インド会社」(鄭維中)、「ポルトガル人のアジア交易ネットワークとアユタヤ」(岡美穂子)である。

こうして明らかにされたこの時代の東アジア海域は、まさに序論「交易と紛争の時代」の東アジア海域(中島樂章)において述べられるような「交易と紛争の時代」であつたといえよう。本書は、アジアだけにとどまらないグローバルな視野から、東アジア海域世界の歴史像を提供するものであり、現在も進行しているグローバル化を歴史的に捉えるうえでも有用な一冊である。

(嘉藤慎作)